

コスモス 2月号

第68巻 第2号

◆宮柁ニカレンダー(II) 二月の歌

吃水に胴の朱のいろあざやけく二月の沖に夕
ンカーは居り
歌集『獨石馬』

宮柁ニは色に鋭敏で、その使い方もうまい。「磧かほろに赤き旗たてて砂利場あり赤き旗はかなし孤ひびりのごとく」(『群鷄』)や、「怒をばしづめんとして地の果はたの白大陸しろたいりく暗緑海あんりよくかいをしのびるたりき」(『多く夜の歌』)など、色の生きている秀歌がたくさんある。

掲出歌は昭和四十一年、尾鷲港での作。上句で船腹の吃水あたりの朱色が鮮やかに見えてくる。また、「二月の沖」が冬と春の間の微妙な海の色合や光を想像させて、朱色を一層引き立てている。広くかつ深度のある構図が印象的な歌。(桑原 正紀)